

### 3、女性マンガの世界

#### ▼ナビゲーター

手塚眞

#### ▼パネリスト

里中満智子 萩尾望都 手塚るみ子 藤本由香里

#### ▼司会進行

さとう珠緒

<さとう>

ただいまより、東京都・東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館主催、読売新聞社後援により、手塚治虫生誕 80 周年記念「手塚治虫アカデミー」を開講いたします。この「手塚治虫アカデミー」は、東京ならではの芸術文化の創造・発信、芸術文化を通じた子どもたちの育成を目的とし、東京都と東京都歴史文化財団が今年度より始動いたしました「東京文化発信プロジェクト」の一環として実施しております。東京が、2016 年オリンピック・パラリンピックの立候補都市として承認され世界の注目を集める今、こうした文化イベントの開催を通して、改めて芸術創造都市であることを国内外に強くアピールして参ります。東京文化発信プロジェクトでは、このほか様々なイベントを開催いたします。詳しくはお手元のパンフレットをご覧ください。ぜひご参加ください。わたくしはこの「手塚治虫アカデミー」の司会・進行役を務めさせていただくわけですが、生徒役という感じで、皆様と一緒に手塚作品をお勉強できたらいいと思っているさとう珠緒です。どうぞよろしくお願ひします。

今日は手塚治虫さんの 80 回目のお誕生日になるわけです。その 80 周年を記念して、全国の様々な場所でイベントが行われていますが、この「手塚治虫アカデミー」もそのひとつとなるわけです。それでは、第 3 回目のシンポジウムを始めたいと思います。まず、この企画者でもあり、ナビゲーターの手塚眞さんをご紹介します。手塚眞さん、お願ひします。

<手塚>

こんにちは、手塚眞です。本日は「手塚治虫アカデミー」に、ようこそおいでくださいました。そして手塚治虫誕生祝いに集まっていたいただきまして、ありがとうございます。

この「手塚治虫アカデミー」は、日本のマンガ文化・アニメ文化の今と未来を考える連続シンポジウムです。もちろん今、日本のマンガ・アニメは世界的に注目されている、非常に日本を代表する文化コンテンツになっていますが、なぜ日本のマンガやアニメがこれほど盛んになったかと言いますと、それはもちろん「手塚治虫がいたから」ということに結論付いてしまうわけです。ではそこで手塚治虫が何を行って来て、日本は今これほど豊かなマンガとアニメの文化を持っているのかということ、もう一度見てみようという機会を持ちました。それがこのアカデミーです。今回 2 日間にわたって 3 回シンポジウムをいたしましたが、これは 3 回目のシンポジウムになります。ところで珠緒さんは、マンガはけっこう読まれていましたか？

<さとう>

そうですね。手塚さんで少女マンガと言えば『リボンの騎士』。見ていました。

<手塚>

やっぱり『リボンの騎士』ですか。でも『リボンの騎士』は、珠緒さんが生まれるよりもずっと前ですね。

<さとう>

そうです。うちの近所の市民会館で、夏休みに必ず映画を上映していたんです。それを毎年楽しみに観に行っていました。

<手塚>

そうですか。そこで『リボンの騎士』や、昔のアニメを見たということですね。

<さとう>

はい。

<手塚>

マンガで、少女マンガというのはお読みになっていたんですか？

<さとう>

そうですね。『SWAN』とか『王家の紋章』とか好きでした。

<手塚>

やっぱりマンガと言えば、男の子の読むものよりは、少女マンガを読んでいたか？

<さとう>

そうですね。やっぱり少女マンガを見ていました。

<手塚>

それは意識して、少女マンガ、少女マンガじゃないと思って、読んでいたんですか？

<さとう>

特に意識はしていないかもしれませんが。お友達の影響などで、目の中がキラキラしている女性の絵がかわいらしいじゃないですか。それでなんとなく見ていたのかもしれないです。

<手塚>

そうですね。今「少女マンガ」という言葉が出てきましたが、この「少女マンガ」というものをひとつのジャンルだと思えば、これが存在するのも日本だけです。世界のどこに行っても少女マンガという種類のものはないんです。

<さとう>

そうなんですか。

<手塚>

そうなんです。これは名称というより、少女に向けた雑誌に、マンガが連載されるということがなかったということがあると思います。きっかけは雑誌から始まったとしても、その後に非常に多彩な少女マンガが広がって、今やもう少女を越えてしまって、大人の女性でも読めるようなマンガができています。こういうマンガの文化の流れも、日本ならではのようですが、実はそこにも手塚治虫は多大な貢献をしていました。というよりも、もしかしたらこの少女マンガの歴史そのものが、手塚治虫から始まったのではないかということ、今日はパネラーの先生と一緒に見て行きながら、「日本が生み出した少女マンガという文化は今どうなっていて、これからどうなっていくのか」というような話を展開したいと思います。

よろしくお願いします。

<さとう>

お願いします。今日は「手塚さん」とお呼びするとお父様と混乱してしまうので、「真さん」とお呼びさせていただいてよろしいですか？

<手塚>

はい。よろしくお願いします。

<さとう>

それではここで、今日の豪華なパネラーを紹介したいと思います。まずはマンガ家の里中満智子さんです。高校2年生の時に『ピアの肖像』で講談社新人マンガ賞を受賞、翌年よりプロのマンガ家としてデビューされました。以後多くの賞を受賞され、全作品及び文化活動に対して、日本漫画家協会賞文部科学大臣賞を贈られております。『天上の虹』は20年以上にわたって執筆されております。よろしくお願いします。

続きまして、マンガ家の萩尾望都さんです。『ポーの一族』は一世を風靡した作品となりました。SF作品『11人いる！』で小学館漫画賞受賞、『残酷な神が支配する』で手塚治虫文化賞漫画優秀賞、『バルバラ異界』で日本SF大賞を受賞。『半神』は野田秀樹さんによって舞台化もされ、話題になりました。よろしくお願いします。

続きまして、プランニング・プロデューサーの手塚るみ子さんです。手塚治虫の長女として生まれ、広告代理店に入社。父・手塚治虫の死後、手塚作品の企画・プロデュースを手掛けております。「私のアトム展」を始め、劇場アニメ『ジャングル大帝』宣伝プロデューサー、手塚治虫生誕80周年の今年は「手塚治虫その愛した音楽」の制作も手掛けられております。よろしくお願いします。

もうお一方、ご紹介します。評論家の藤本由香里さんです。4歳の時に読んだ手塚治虫の『リボンの騎士』をきっかけに、マンガの面白さに目覚めました。それから40数年マンガを読み続け、編集者として働くかわら、コミック・女性・セクシュアリティなどを中心に評論活動を行って来られました。しかし、今年から明治大学で「漫画文化論」をお教えしています。手塚治虫文化賞を初め、様々な選考委員も歴任されております。よろしくお祈いします。

#### <手塚>

このアカデミーで3回目のシンポジウムになりますが、初めて女性の人数が男性を越えてしまい、5対1で男性の僕は圧倒的に少数になりますが、よろしくお祈いします。今回のシンポジウムテーマを「女性マンガの世界」と付けましたが、果たして女性マンガというのは何かということです。先ほど少女マンガという名前を出ささせていただきましたけれども、少女マンガというのは皆さんも何となくイメージがありますが、今や少女という名前ではくくりきれないような女性作家による作品、あるいは女性を描いた作品が増えています。本来はもうそのジャンル名は必要なく、広くマンガというものだけで捉えてもいいのではないかと思う気持ちの一方、でもやはり、女性マンガというものが少女マンガを元として発展してきたという、ひとつの歴史があるかと思ひます。そういう歴史の中で、独特の少女マンガのスタイル・流れがあるのではないかと思ひます。今日は現役で活躍なさっている作家の先生方にも、そのへの意識の流れと、これからどのような作品作りに向かわれて行くのかということをいろいろ語っていただきながら、日本の生んだ、少女マンガから女性マンガへという流れが、今後どう社会に広がっていくのかということテーマに、お話を進めたいと思ひます。よろしくお祈いします。

#### <さとら>

よろしくお祈いします。まずお一方ずつ、手塚マンガとの出会い、印象、エピソードなどをお話しいたきたいと思ひます。「手塚作品の女性」というお話でも結構です。里中さんからお祈いします。

#### <里中>

女性マンガか少女マンガかというお話がありましたけれども、私自身子どもの時から、少女マンガ、少年マンガの差をあまり感じずに、マンガに親しんできたんです。たまたま少年雑誌があつて、たまたま少女雑誌があつて、それぞれそこに載っているマンガを少年マンガ、少女マンガと呼んできたわけです。そのことによつて、少年雑誌を覗く時のほのかな冒険心というものがありました。「女の子は少年雑誌を読むものじゃない」と言われながら一生懸命読んできましたが、どうして読むようになったかというきっかけは、やっぱり手塚先生なんです。

昭和23年生まれですから遥か大昔ですが、小学校1年生になった4月、入学式の少し前です。小学校に上がると毎月1冊雑誌を買ってもらふというのが近所の習慣になっていたみたいで、私も母親に本屋に連れて行ってもらつて、「小学生になるから、毎月何か1冊少女雑誌を買ってあげる」と言われたんです。好きなものを選びなさいと言われて、本屋さんにある雑誌をめくりながらずっと見ていったんです。その中で『とんから物語』という作品が目につきました。その時点では「作者・手塚治虫」の名前も知らず、「おさむしかな？」と、みんなそう思うんです(笑)。だから『なかよし』を買ってもらったんです。『なかよし』創刊の年でした。4月号を買ってもらったんですけれども、既に連載は途中なんです。1月から始まっているので、この前の話が見たくて仕方がなかったんです。まだ月刊誌を貸していましたからそれで貸本屋さんに行つて、それで1回目からちゃんと見て、貸本屋さんのおじさんに「この本いらなくなつたら売らなうしょう？ 私に売つて、置いといてね」と頼んで、買ったんです。「マンガ雑誌は捨てなさい」と言われるので全部置いておくわけにはいかなかったから、『とんから物語』のところだけ切り抜いたんですけれど、それは今でもとつてあります。どういふお話かという、ある村がダムで水没するんです。当時の日本というのは高度成長に入つた頃で、これからの電力消費に向けて、山を切り開いてダムを作る。社会全体がそういう動きの中で、みんな前向きに国土開発に関わつていたんですけれども、その沈んでしまう谷に生きる動物や植物が全部擬人化されていて、沈んでいく樹の精などが話すんです。主人公の少女は人間の女の子ですが、東京大空襲で火に炙られて目をやられて見えなくなつて、山の生き物たちと心を通わせて過ごすんです。今思つて、すごい環境マンガだと思ひます。水没する谷に生きる生き物たちすべての言い分が書かれていて、非常に先見の明がある作品だと思ひました。それが気に入ったんですが、当時の月刊誌の連載というものは、1回で8ページ分ぐらいしかないので、見たくて、「そういえばこれと同じ名前が、本屋の雑誌の中に並んでいた」と思つて、また貸本屋さんに行つて確かめたら、少年雑誌でいろいろなものを描かれていたんです。だから小学校1年生から、少年雑誌と少女雑誌を同時に読むようになりました。私自身の受け止め方としては、「手塚治虫というマンガ家がいて、この人の描くのは非常に面白い」。それは少年マンガであれ少女マンガであれ、私にとっては何の変りもなかったんです。ただ鬱陶しいのは、いつも貸本屋さんのおじさんが「女の子なのにどうして少年雑誌を借りるんだ」と言うことでした。月刊誌の発売日はだいたいかたまっているんですが、学校に行つてクラスのお友達と新しく出たマンガの話をする時に男の子たちと『鉄腕アトム』の話をしたり、その頃になると『少女クラブ』も読んでいたし、第1期『火の鳥』とか『リボンの騎士』の最初のバージョン、『少女』という雑誌の『そよ風さん』などを読んでいました。少年雑誌も読んでいましたし、遡つて『ジャングル大帝』の1期のもも読みました。動物もの・少年もの・少女もの、まったく関係なく、とにかく大好きになりました。私からすると、もう手塚治虫というブランドがあつて、この人のものだったら絶対面白い、楽しい、感動できるというものがあつました。

余談になりますけれども、小学校・中学校を通じて、一番はまったのは『ライオンブックス』シリーズです。難しすぎてややこしすぎて、クラスでは人気がないんです。でも、みんなの分からないものにはまれるという喜びがありまして、本当に好きでした。だけど少女マンガ雑誌と言われる中で手塚作品の主人公たちというのは、自分で行動するんです。『リボンの騎士』に代表されるように「男装の麗人」。これはアクションを伴うわけです。恋愛もあるんですけどもちゃんと動きがあって、女の子からのアプローチもあるということで、決して受け身だけではない女の子の行動的な面を見ましたが、いずれにせよ、女の子でも男の子でも手塚マンガの主人公は、どちらかと言うとあまり性差を感じさせないんです。男の子の主人公は『鉄腕アトム』に代表されるように「かわいい」「キュート」「いじらしい」、どちらかと言うと女の子みたいなんです。『リボンの騎士』もそうですが、その後の『ひまわりさん』の主人公など、少女マンガに登場する女の子は非常に冒険心があって男の子みたいなんです。『あらしの妖精』もそうでした。あまり男性、女性と傾いてなく、それでなんか色っぽいです。だからつくづく考えてみると『リボンの騎士』はタイツを履いているわけで、なんか色っぽいです。ショートカットでタイツを履いて、宝塚的と言われるかもしれませんが、手塚先生は宝塚やバレエがお好きだったので、その感じはあるのかもしれませんが。性差を感じないというのが特徴かとは思いました。時間を気にせずに喋ってしまってますいません。

<手塚>

ありがとうございます。先ほど男性ばかり集まって議論している時も、色っぽいという話を中心になって展開したんですけれども、女性の目から見ても色っぽかったんですね。

<さとう>

セクシーなんですね。続きまして萩尾望都さん、お願いします。

<萩尾>

里中先生のお話を聞いていて、「性差がない」というところが、そういえばそうだと、すごく思いました。私は、絶対に子どもの本が少ないという環境に置かれていたんです。だからとにかく、手に入る「文字があって読めるもの」というのは何でも読みたいわけです。少女小説、途中から始まる学級文庫、手に入るマンガ、全部読みたいんです。その中ですごく面白いという作品があって、名前を見ると「手塚」と書いてある。しばらくしてから別の本を読んで、面白いと思って見ると、「手塚」と書いてある。こんなふうにして、マンガ家で最初に「手塚治虫」の名前を覚えていったんです。出会いと言えば、最初はそのへんからです。その後はやっぱり『リボンの騎士』『エンゼルの丘』、少年誌では『鉄腕アトム』、やはりこだわりなく、ずっと読んでいったんです。「どうして少年マンガを読むの？」というものに対しては、面白いからという答えぐらいしか出ないんですけど、今言われたように、アトムが女の子っぽかったり、女の子がすごく活発で元気だったり、そのへんがすごく気に入っていたんだなと思いました。当時少女小説のジャンルは戦後の影響を引きずっていて、「母子もの」「意地悪なお金持ちの女の子」「実はお母さんじゃなかった」というバージョンがあって、それはそれで読むんですけどパターンがだんだん分かってしまうんです。それでいくと手塚治虫のマンガは何を読んでも新しく、新鮮で、どんどん夢中になっていきました。それが高じて自分でも描くようになって、高校の頃にはペンで描く練習などをして、マンガ家になりたいけど無理だろうな、なんて思ったんです。手塚治虫さんの『新選組』という単行本になったマンガをお年玉で買って一気に読みしたら、すごくはまってしまったんです。元々手塚治虫さんの作品には「読んだら考える」という変なものがあって、小学校の頃は1作読むたびに「この後どうしたんだろう」「この人は死ぬ時に何を考えだろう」と、つい考えてしまうんです。それだけ、異様な不思議な思い入れが入ってしまうシーンの多い作品だったんです。その『新選組』のある1シーンにもすごくはまってしまったんです。主人公がダブルバインドに、組織のために自分が親友だと思っている友を斬りに行かなければいけないと、決闘して斬り殺してしまうんですが、このまま組織にはいられないと抜けてしまうんです。本当に1週間ぐらい彼の気持ちが入ってきてしまって、その時「マンガ家になりたい」と決心したんです。そうしないと頭の中にずっと主人公が住んでいてどうしようもなかったんです。そんな手塚体験の挙句、ここにいるわけです。

<さとう>

ありがとうございました。

<手塚>

次のるみ子さん。あえて「さん」と付けると、何となく兄妹じゃないみたいです。よく「長女」と紹介されているものですから、彼女が姉で僕が弟と誤解している方が世の中にたくさんいるんですが、僕が一応上で、兄と妹という関係になります。やはり彼女も「手塚」という苗字が付きますので、今日は「るみ子さん」でよろしく願いいたします。

<るみ子>

兄から「るみ子さん」と言われると、非常にくすぐったく、落ち着かない感じです。今日は他の3人のパネラーの先生方の中で、わたくしが身内でこのような場所に座らせていただいて、決して客観的に父の作品が見られないような立場ですが、そういう部分での話ができればと思います。

生まれたのが1964年ですので、少女マンガと言えば里中先生、萩尾先生で、むしろわたくしは両先生の作品で育ったぐらいです。父・手塚治虫の少女マンガをリアルタイムで読んでいた世代ではなく、むしろ少年誌に描くようになってからしか知らないんです。「手塚マンガとの最初の出会いは」と聞かれると、本当にいつ出会っていたのだらうと思うんです。生まれて、物心が付くころには、家にゴロゴロと作品が転がっておりまして、おもちゃを拾って遊ぶような感覚で、父のマンガを読んでいたんだと思います。それが父のマンガだったという理解がどこまであったかというのは分かりません。最初に、父のマンガだという意識が持てたのは、手塚マンガの中で一番好きな『ジャングル大帝』という作品になります。あえて「少女マンガ」という部分で思い返してみますと、里中先生や萩尾先生のようにリアルタイムで雑誌を読んでいた思いが全然ないので、たぶん単行本になってから読んだと思うんです。それでもいつ、何が最初だったか、記憶はあんまりはっきりしていません。母方の田舎が大阪にあって、夏休みにおばあちゃんの家遊びに行った時に、おじが父のマンガをたくさん持っていて、おばあちゃんの家で父の単行本を読むという中に『リボンの騎士』『エンゼルの丘』というものがあつたんです。私の中の遠い記憶で、父親の少女マンガといえるものを読んだというのは、そのおばあちゃんの家で、単行本で読んでいたというものです。特に『リボンの騎士』よりも『エンゼルの丘』がすごく気に入っていて、主人公・ルーナの髪型がかわいかったんです。その頃は、私はまだおかつぱだったんですけども、ルーナのショートカットにすごく憧れ、真珠の髪飾りをしているそのスタイルがすごくかわいくて「そういう頭にしたい」と、幼心に思っていた覚えがあります。そうこうしているうちに、父もいつの間にか少年誌にばかり描くようになっていましたので、雑誌で少女に向けて描いている作品という『リリカ』という雑誌に描いていた『ユニコ』ぐらいしか記憶にありません。それはもう人間ではなくファンタジックな世界のおとぎ話ということで、あまり少女マンガという印象がないんです。私が10代になってから、『ブラック・ジャック』であれば「ピノコ」であったり、『三つ目がとおる』であれば「和登さん」であったり、少年誌に描いている作品のヒロインの存在感というのが、むしろ私の中では「手塚治虫の少女」という印象があります。

私の友達もそうですが、父の仕事関係の方やいろいろな方にお会いするたびに「るみ子さんはウランちゃんのモデルですか」「ピノコのモデルですか」「手塚先生の描く女の子にそっくりですね」と、本当によく言われました。自分ではまったくそんな意識はないんですけども、『ブラック・ジャック』を描いていた頃、わたくしは小学生から中学生ぐらいでしたし、『ブライム・ローズ』の主人公の、わりと感情的なキャラクターというのも、私は当初かなりのカンシャク持ちだったので、もしかしたら多少はそういった要素が入っているのかと思います。父の描いたヒロインキャラクターと自分を照らし合わせるということは昔からよくありまして、現在も、こういうところが似ていると思うことはあります。

先ほど里中先生が、手塚キャラクターの、少女キャラクターよりもアトムに「色気」というお話が出ましたが、やはり身内なもので、父の作品に「色気」や「エロティシズム」というものを感じるのはすごくいやです。自分の父親とエロみたいなものが近づくのがすごくいやで、そこは何となく嫌悪していました。特に10代の思春期だった時に、父の『奇子（あやこ）』という作品をたまたま父の書棚から単行本を読んで、すごいショックを受けたんです。「奇子」という主人公は、少女の頃はおかつぱ頭で似ているなと思って読み始めたんです。途中からテーマにあまりにも付いていけなくて、しかもそれが、自分の父親が描いた作品だということで、多少ショックもあったと思うんですけどもすごく嫌悪感を持ったんです。それからまったく、10代の頃は父のマンガを読まなくなってしまったんです。「手塚治虫」は父でありながらも、大人向きのマンガを描いていることがすごくいやだと思っていた時期だったと思います。10代の終わりごろまでは、本当に父の作品を読まずに来ました。いろいろな作品を読み返しているんですけど、未だにちょっと、男性的な部分が見え隠れするような作品は読みづらいと思うので、そのへんは、今日はあんまりお話ができないかと思っています。そのへんはぜひ先生方をお願いしたいと思います。

<手塚>

ありがとうございました。今話にあった通り、手塚治虫が少女を描く時に誰をモデルにしたんだろうかということですが、やはり身近にいる人間が一番モデルになると思います。最初のモデルは、父の実の妹にあたる「美奈子さん」とおっしゃられます。一緒にマンガを描きっこしていたというぐらい、大変仲の良い兄妹であったということです。この実の妹さんが、かなりモデルになっていたのではないかと、僕は勝手に推測しております。そして2番目が、もちろん「るみ子さん」です。先ほど本人も言うておりましたけれども、ピノコの行動のある部分は、間違いなく彼女の行動が示されているのではないかと思うところもあります。もちろんそれだけではないと思います。他にいろいろ思い付いた部分があるかと思っています。そういう身近な所からの視点で、ぜひ手塚マンガの女性観を語ってほしいと思います、今日は無理を言って参加してもらいました。

<さとう>

続いて藤本さん、お願いします。

<藤本>

藤本由香里です。私は昨年まで25年間、書籍の編集者をしていました。一方で、ずっとマンガを読み続けてきたので、「マンガをたくさん読んでいるみたいだから、マンガのことを書いてくれない？」ということから始まった評論の仕事が、その後も次々と続いていき、とうとう昨年、会社を辞めて、今年からはマンガのことを教えるのが本業になりました。

そんなふうになんか職業になってしまうくらい私がマンガにはまったのは、まさに手塚先生の『リボンの騎士』と出会ったからです。4歳の時でした。なので、この『リボンの騎士』は、私の魂の原点と言えるくらいものすごく思い入れのある作品です。手塚先生との出会いは本当に人生を変える出来事だったと思います。

きっかけは、4歳の時、父親の散髪に付いて行ったことでした。その頃の床屋さんは、雑誌というものがけっこう置いてある所だったんです。で、父親の散髪を待っている間に、そこにあった3冊の『なかよし』を読み始めました。すると、そこに載っていた『リボンの騎士』が面白くて、本当に夢中に引き込まれてしまった。ところが、男の人の散髪はすごく早く終わるんです(笑)。けどこっちは、一応字が読めるとはいえまだ4歳なので、そんなに早く読めないじゃないですか。なので「帰るぞ」と言われても、「ちょっと待って。ちょっと待って」と言って絶対にそこを動かなかったんです。そうしたら床屋のおじさんが「お嬢ちゃん、持って帰っていいよ」と言ってくださって、その3冊の『なかよし』を抱えて喜んで家に戻ったというのが、最初の出会いです。もしかしたらその3冊の『なかよし』は、床屋さんのおじさんの娘さんのものだったかもしれないんですけども、それは人生を変える出会いになったということで、許していただきたいと思います。

それから、とにかく『リボンの騎士』を読みたくて、毎月『なかよし』を買ってもらうようになりました。そして、マンガってこんなに面白いんだ、と目覚め、家のすぐ近く、歩いて1分もかからないような所に貸本屋さんがあったので、そこに通い始めました。実は少女マンガは『なかよし』だけで、あとは『少年』『少年画報』『少年ブック』などを読んでいました。今から考えてみると、それは手塚先生の作品を探して読んでいたんだと思います。その頃、手塚先生はもう、『なかよし』以外には、少女誌には描かれていませんでしたから。少年誌で最初に「手塚先生だ」と思って見つけたのが、『少年』に載っていたアトムです。それと『ふしぎな少年』も連載で読んでいた記憶があるのですが、年代があわないのが不思議です。『ビッグX』も『少年ブック』で始まったと思います。そのような形で、ずっと手塚先生の作品を追いかけて少年月刊誌も読むようになりました。けど、ちょうど68年ぐらいから少年マンガの月刊誌が次々に廃刊になるんです。読んでいた少年マンガがなくなったということと、ちょうどその頃少女マンガがすごく面白くなってきていて、『りぼん』で始まっていた水野英子先生の『ハニーハニーのすてきな冒険』や北島洋子先生の『伯爵令嬢スイートララ』がすごく好きで、その頃から『りぼん』も読むようになりました。『マーガレット』『別冊マーガレット』もちょうど面白くなってきた時期です。後から考えると、ちょうど60年代の終わりというのは、それまでは男性作家がほとんどだったんですけども、女性作家が少女誌で活躍し始めた頃なんですね。「継母にいじめられて」などというような話ではないお話がすごく出てきたことが、わりとビビッドに、私の気持ちの中に響いてきたんだと思います。とってもお洒落なお話やドキドキするお話が生まれてきた時代だった。そこからずっと、私は少女マンガを読み始めます。そうやって、たぶん60年代の終わりぐらいから回帰して読み始めた少女マンガの魅力と、『リボンの騎士』が持っていた魅力というのは、すごく重なっている部分があると思います。そういう意味でも、やはり『リボンの騎士』は、“少女マンガ魂”の原点であったのではないかと思います。

今回のお話があってから、『リボンの騎士』の何が特別だったのか、ということと、ちょっと考えてみました。ひとつには、特に『少女クラブ』版の『リボンの騎士』が1953年に始まった時には、初めて少女マンガにドラマを持ち込んだということが大きかったと思います。今回『リボンの騎士』の連載が始まる前と後で、少女雑誌の中のマンガがどう変わったかということと、2日ほど国会図書館に行きまして調べてきました。すると、手塚先生もおっしゃっているように、52年までというのは、「生活ユーモアコマ漫画」という形で、2ページ、せいぜい4ページぐらいの、主人公の女の子が「失敗をする」「ドジをする」というもので、最後がチャンチャンと終わるようなものばかりなんですね。必ず落ちが付いている。後発の『少女ブック』だけ、次回に続いていくようなものもあるんですけど、やはり波乱万丈のドラマという感じではありません。けど『リボンの騎士』は最初から、男の心と女の心を持ったお姫様が生まれて、王子として育てられるという本当にドラマチックな構成です。その後、『リボンの騎士』が始まった、ちょうど53年から54年にかけて、各誌で1つか2つストーリーマンガの連載が始まり、55年になると一気にストーリー少女マンガの連載を始め、それからは明らかにストーリー少女マンガが雑誌の主流になっていきます。そのへんを見ても、やはり『リボンの騎士』の影響がいかに大きかったかということが、ひとつ言えると思います。

『リボンの騎士』の魅力のもうひとつは、るみ子さんには申し訳ないですが、線の持っているエロティシズムが、やはりすごく大きかったということです。私は4歳5歳の子どもだったんですが、エッチな意味のエロスではなく、やっぱり手塚先生の作品には、線の持っているエロティシズムというのがすごくあって、そこに惹き付けられたんだと思うんです。今、「萌えマンガ」というのがありますが、萌え系の線というのは、少女マンガのかわいらしさを少年マンガに取り入れようとした時に生まれたと言われますが、あの萌え系と言われる感覚の線の始まりというのも、やはり手塚さんの線にあったと考えていいのではないかと思います。

もうひとつ、これがたぶん一番大きい問題だと思いますが、手塚先生の作品を読んでいると、すごく世界の本質に触れている感じがするんです。少年マンガも少女マンガもそうですが、その中で「世界の秘密」と「心の秘密」というものがあるとすると、手塚先生は、少年マンガでは「世界の秘密」を、少女マンガでは「心の秘密」を描こうとしたんじゃないかと思っています。それで『リボンの騎士』では、「男の心」と「女の心」というものを出してくる。そこには女の子が持っている葛藤みたいなもの、つまり「私はお姫様にもなりたいけど、剣を持って戦う戦士にもなりたいの」ということが描かれていた。実は女の子は両方になりたいんだ、「女の子だからお姫様でいいでしょう」というのではない、ということと、『リボンの騎士』が最初に出してくれたんです。それが、それを読んで育った萩尾先生や里中先生などに受け継がれて、私たちが読んでいる少女マンガがどんどん生み出されてきた。そのことは、すごく日本のマンガにとっての財産だったのではないかと思います。

<手塚>

ありがとうございました。後ほど藤本さんに、少女マンガの発展についてお聞きしようと思っていたんですが、今全部お話しされたので助かりました。

皆さんのお話を聞いてお分かりになった通り、少女マンガの始まりに『リボンの騎士』には、そこから始まったと言えるぐらい非常に大きなものがあったのではないかと思います。意外と若い読者の方には、手塚治虫の少女マンガと言われても『リボンの騎士』ぐらいしか思い浮かばない方もいるかと思いますが、どういう作品を描いてきたかというものを、ざっとご紹介したいと思っています。一番知られている『リボンの騎士』は『なかよし』という雑誌に描かれたものですが、実はこれはリメイクなんです。自分の作品をリメイクした、2番目に描いた『リボンの騎士』で、元々はその前に『少女クラブ』版というものを、オリジナルで描いております。スライドで見たいと思いますので、ちょっと明かりを消してください。

(※スライドでの解説がありましたが、割愛させていただきます)

<さとう>

それでは、ここからはフリーディスカッションに移りたいと思います。

<手塚>

ここからは、皆さんご自由に発言されてかまわないかと思います。まず皮切りに、藤本さん。先ほどいろいろと詳しくお話いただきましたが、手塚治虫が描いてきた少女マンガの世界というものが、具体的に今の女性マンガにまでどう発展してきたかというようなことを、ご説明いただけますか？

<藤本>

戦後の少女マンガ雑誌というところから始めますと、53年に『リボンの騎士』の連載が始まって、これがいわゆる「ストーリー少女マンガ」の第1号と言われています。先ほど申し上げましたように、55年からストーリーマンガというものが少女マンガの中でも主流になってきて、『少女』の58年の1月号から高橋真琴さんの『あらしをこえて』というバリエーションマンガが始まります。ここで3段ぶち抜きスタイル画、ページの縦いっぱいを使ったスタイル画というものが突然表れて、ここから少女マンガのコマ割りが、少年マンガと違う方向に発展し始めます。規則的なコマ割りではなく、コマの形をいろいろ変えたり重ねたりというのは、このあたりから始まるんです。その頃は、少女マンガを描いているのもほとんどが男性マンガ家で、女性マンガ家は長谷川町子さんや上田シコさんなど、ひとつの雑誌に一人か二人しか女性マンガ家はいませんでしたが、この50年代終わりぐらいから、わたなべまさこさん、牧美也子さん、水野英子さんといった方々が活躍し始めました。

64年が里中先生のデビューですが、その頃になるとそれこそ『リボンの騎士』を読んで育った少女たちが自分でマンガを描くようになり、60年代半ばぐらいから若い世代の作家たちが入ってくるんです。そして60年代も終わりになると男女が逆転して、少女マンガを描くのはほとんど女性のマンガ家というようになっていきます。

70年代になると、もっと男性作家の数が少なくなっていき、手塚マンガやそれに続く水野先生・牧先生・わたなべ先生のマンガを読んで育った女性作家が次々にデビューする「少女マンガ黄金時代」が始まります。『ベルサイユのばら』『エースをねらえ!』『アラベスク』『はいからさんが通る』『アリエスの乙女たち』『ガラスの仮面』『キャンディ・キャンディ』といった作品は全部70年代に始まるんです。一人の少女の成長を描く、ドラマチックなビルドアップスロマンですね。70年代には、それが花開くと同時に、「花の24年組」と言われる萩尾先生、竹宮先生、大島先生などの、少年を主人公にして少女の内面を描く、非常に文学性が高いと言われる『ポーの一族』『風と木の詩』『バナナブレッドのプディング』などが出揃ってきます。そして70年代後半になると、“乙女チック”と呼ばれる、陸奥A子さん、田淵由美子さん、太刀掛秀子さんという流れが始まり、ちょっと身近な感じの少女マンガが出てきます。そして80年代に入ると、ものすごくドラマチックな話よりも、『別冊マーガレット』を中心にして、くらもちふさこさんなどの、現実的で等身大の主人公を扱ったマンガが増えてきます。80年代の終わりになると、『どうぶつのお医者さん』や川原泉さんの物語のような、少しユーモラスな、今までになかったような少女マンガが出て来て、本当に多様化の時代が始まります。

80年代の初めにレディースコミックができたというのも、かなり大きいです。つまり、里中先生が最初におっしゃったと聞いていますが、「少女マンガを卒業した読者のために大人の女性向けのマンガが必要だ」ということで、次々とレディースコミック誌というものが創刊されました。それが中小の出版社も参入して少し官能のほうのイメージに傾斜し始める80年代の後半になると、ヤングレディース誌という、少し高年齢層向けの少女マンガというものができてくるんです。だから80年代は本当にいろいろなジャンルが出始めた時代。

90年代に入ると、深見じゅんさんの『悪女(ワル)』、逢坂みえこさんの『9時から5時半まで』などのOLお仕事マンガのようなものも入ってきます。90年代はまた、湾岸戦争の影響もあると思いますが『セーラームーン』を始めとする戦闘美少女ものや、清水玲子さんの作品など、生命科学を中心に据えて生命や意識の変容といった主題にまで深く入り込んだ作品が出てきます。「生命科学」や「生命の変容」というのは、手塚先生がずっとテーマにして来られたことなので、手塚先生の問題意識というのは、ある意味少女マンガのほうで、ずっと純粋に受け継がれてきたのかなと思うところもあります。以上、少女マンガ50年史でした。

<手塚>

ありがとうございます。

少女マンガ史は、今お話があった通りです。少女マンガから始まって、女性のマンガが多様化しているということです。手塚治虫を含めて、最初の少女マンガは男性が描いていたということが、まずあります。里中先生、萩尾先生は女性の立場からお描きになっているわけですが、最初の頃に読んでいた男性が描いていた少女マンガと、今自分たちがお描きになっているものは何が違うか、違わないのかということをお話いただきたいです。里中先生。

<里中>

そもそも私が、どうしてマンガ家になりたいかと思ったことと繋がりますが、昔々の少女雑誌に載っていた少女マンガや少女小説は、萩尾さんがおっしゃっていたように「継母だからいじめる」「貧しいことは不幸である」など、「女にとって幸せとはこういうものです」「女の子にとって幸せな生き方はこういうものです」という状況が描かれていて、そこで、ただメソメソしているだけの主人公がほとんどだったんです。「待てば海路の日和あり」ではないですが、じっと耐えていれば遺産が入るとか、いつか白馬に乗った王子様がやってくるというようなものが多かったんです。女性が自分から自分の人生を切り開くものではない、そういうことを望まない、ただ耐えているのが女のかわいさというようなものがすごく多かったんです。そんな中で、少女マンガの改革者というのは「手塚治虫」「ちばてつや」「椋図かずお」だと思っています。お三方とも、男性が少女マンガを描いていた時代に、女の子が主人公である理由がちゃんとあるものを描いていらしたんです。私が自分でマンガを描くようになって将来何とかしたいと思っていた時に、マンガ家になってもこういうのは絶対描きたくないというものがありません。つまりそこには、女の子の意思がないんです。自分の意思があり、決心があり、行動があるのだから、何を考えているのか分かるヒロインをちゃんと描きたい、描けるはずだと思っていました。手塚先生の作品もそうでしたし、私が目覚め始めた頃にデビューなさって少女マンガを描いていらしたちばてつやさんもそうでした。不思議なことに、手塚先生は男性だと思っていたんですが、女の子の感性という意味で、ちば先生と椋図先生は女性だと思っていたんです。でも考えてみたら、マンガというものは、作者は男性か女性かは関係ないんです。だからこそ、そこに自由に描けるんです。手塚先生は、その後の日本のマンガのすべての裾野を広げたくっかけになった人です。だから、少女マンガはこういうものだという常識をきっとお嫌いだっただろうし、気になさってないからこそ、おそらく実験的に「男装の麗人」「女の心と男の心を持っていたらどういふ葛藤があるのか」が描けたと思うんです。絵のかわいらしさ、画面のすばらしさはもちろんそうですが、テーマのピックアップの仕方が、マンガだからという前提がないんです。そこから手塚治虫の少女マンガも始まっていますので、アクティブなヒロインや、女であることは絶対的にしょうがないけれども、それを理由にしない女の子というのは、ちば先生・椋図先生もそうでした。椋図先生の場合、女のこんな怖さは男の人には思い付かないだろうと思うようなものがあつたので不思議でした。そのように、マンガ家という職業そのものが非常にユニセックス的なものですから、各作品もユニセックスで本当は当たり前なんです。だから私自身も、女の子だということを言い訳にせずに生きていけるというドラマを描きたいと思って、少女マンガを描きたいと思ったんです。私などは力がないから、若い頃は編集者から「ただ理屈っぽいだけでうとうしいから、もうちょっと可愛げのある主人公を描きなさい」とよく言われました（笑）。でも手塚先生は、すごくうまくドラマになさっていました。

先ほどの藤本さんの話で思い出したんですが、昔の少女マンガの扉絵は、扉絵と言いましても今のようにページ数がなく4ページ8ページですから、扉絵の部分からストーリーが始まるんです。だけど大抵の少女マンガの扉の部分、こっち向いてニコリか、空を見上げてシクシクか、そういう絵が多いんです。私がすごく印象に残っているのは『少女クラブ』版の『リボンの騎士』で、扉がいきなり、サファイアがものすごく切ない顔で涙ぐんで泣いているんです。王子がそれを抱きとめようとする、ものすごくドラマチックなシーンなんです。それは読者目線じゃないんです。二人がお互いに見つめ合っていて、そこには濃密な関係があるわけです。それを見てドキドキしまして、なんだかすごく素敵な大人っぽい世界と思ったんです。るみ子さんの前で本当に申し訳ないんですけども、みんな、先生の絵をエロティックとおっしゃるけれども、エロティックでない生命はないんです。先生の絵は一見あどけなく見えますけれども、見えるくせにちゃんと生きていますのでエロティックに見えるんです。その意外性で、みんな言っているだけなんです。だからいかにもエロという絵には、エロティックはないんです。だから手塚先生のエロティシズムが漂っている場面というのは、線の柔らかさはともかくとして、ご本人が「さあどうだ」とばかりにお見せにならないから、かえってエロティシズムを感じるんです。だから女性の登場人物だけではなく、男性もそうです。るみ子さん、重ね重ね本当にすみません。

<るみ子>

とんでもございません。

<里中>

エロティシズムが出たついでに。

1973年だったと思います。仕事に大阪へ行く時、手塚先生と同じ仕事だったもので、たまたま新幹線で隣同士だったんです。まだ、のぞみがない時代です。朝早い新幹線だったので、手塚先生は前の日に丸の内駅のステーションホテルにお泊りになったんです。私は主催者から「隣の席は手塚先生です」と聞いていて、すごくドキドキしていたんです。それまでも、雲の上の人と思いながら口をきいたことは何度かあるんですが、二人きりでずっと一緒にできるなんて、プロになって良かったと思ったんです。私が席に座ってだいぶ経つけれども手塚先生はなかなかお見えにならないから、これがよく言われている遅刻ということかと思って、一人で行かなきゃ

いけないのかな、残念だなと思っていたら入って来られたんです。本当に夢見心地でしたが、そこでいろいろなお話を聞かせていただきました。

まず、新婚当時のお話です。オノロケから始まって、でも嬉しくて仕方がないんです。どんな言葉も、手塚先生の口から出る言葉を、今私だけが聞いているという恍惚の時間でした。私も固くて真面目で、せっかく手塚先生とご一緒しているんだから、せめて仕事の話ぐらいしなければいけないと思って「先生、今後どのようなものをお描きになりたいんですか？」というようなバカな質問をしたんです。そうしたら先生はそれまで以上に一生懸命お話しになって、「究極のエロティシズムを描きたい」とおっしゃったんです。何をおっしゃりたいのか分かるような気がしたのは、ちょうどその少し前に『S-F マガジン』という雑誌の中で、ショート・ショートの絵物語を描いていたんです。マンガとは言えないぐらい文章も多いんですけど、これが究極のSFなんです。知っている人が少ないので残念ですが、あんなに高度なSFはないと思います。子どもの時に読んだ『ライオンブックス』シリーズの次に驚きでした。私にはその世界が頭にあって、この先生にとっての究極のエロティシズムというのは、つまり「生命とは何ぞや？」ということだと受け止めたんです。先生もそんな感じでお話なさっていました。「僕はまだ描けていないんだ」とおっしゃったんです。「何度かチャレンジしているけれども、究極の真のエロティシズムは描けていない。それが描けるまではチャレンジし続けたい」とおっしゃっていました。確か医学博士号をお取りになった時のテーマが「タニシの精子」でしたよね。

<手塚>

そうです。

<里中>

なんか変なものと思っていたんですが、つまり生命の根源ということをすごくお考えになるから、結局作品すべてがそうだと思うんです。私は、この先生にして、まだ自分は描けていないとおっしゃっていると思って、見たいと思ったんです。その時に「君はこれから何を描きたいの」と返されて、その場の勢いでしどろもどろに「私もいつか描いてみたい」と言ったんです（笑）。「究極のエロとは、つまりどういうことでしょう。一生のテーマですね」と言いながら勢いで答えてしまったけれども、全然描けないと思いながら来ています。だから、先生の作品の中のエロティシズムというものは、イコール生命の根源への好奇心だと思います。最後にピノコが出ましたが、私はマンガ史上、あんなに危ないキャラクターはいないと思っています。

非常に危ないです。女性・男性・年齢ということだけではなく、性というものはピノコに象徴されるような「危ういものである」と思うんです。画面に出ているだけですごく危なくて、ブラック・ジャックはよく平気だと思います（笑）。私に変態なのかもしれませんが、ピノコはそそられるんです。あんなかわいい振りをしていながら、なんという濃密な女かと思います。

<手塚>

（笑）いろいろ貴重なお話をありがとうございます。

<萩尾>

でも、私もピノコにはそう思います。あの子は、ストーリー上では確か、双子の片割れで、全部バラバラで出てきたんですよね？だから『どろろ』を作る過程と似ています。一応、5歳児として、いきなりの出現するんですけど？

<手塚>

お腹の中に18年間いたので本当は18歳ということになるんです。外に出てきた時に「姿は5歳児でも精神的には18だ」と言い張っています。言い張ってはいますけれども、やはり外に出ての体験がないので幼児と同じです。その矛盾を抱えたキャラクターです。

<萩尾>

だんだん成長して行くんですけど？ 始まってから終わるまで、あの形でしたよね。ということは？

<手塚>

成長はしません。

<里中>

心だけは女として十分に意識しているんだけど、ピノコ自身は自分の外見に似合うような振りをしようと、一生懸命やっているんじゃないかと思うんです。また他の話になりますけど、楳図かずおさんの『赤んぼ少女』の「タマミちゃん」という、あの恐ろしさ。楳図さんの世界になると、あの話になるわけです。手塚先生になると、気付かない人は気付かないまま、ピノコはかわいいキャラクターで終わってしまうんです。そのへんが、分かる人には分かるんです。

これが元々の少年マンガや少女マンガでも、子どもが読んでも面白いけれども、分かる人には分かるすごく重くて深いテーマを抱えていますでしょう。テーマ・ストーリー・シナリオ・キャラクターも抱えている代表がピノコなんです。私はピノコを見るたびに、絶対ピノコにはなりたくないと思うんです。だけど、もし私の側にピノコがいたら、何とかしてやりたいと思うあまり、何とかしてしまうんじゃないかと思うんです。

<萩尾>

何とかしてしまうんですか？

<里中>

何とかしてしまう。犯罪です。そういう恐ろしさがあるんです。

<萩尾>

脳を取り出してどこかに。

<里中>

大人の女の体にしてやりたい。あるいは、このままの形で大人の女として扱おう、となる。ピノコはものすごく「危ない」です。

<萩尾>

「奇子」みたいな危なさが？

<里中>

危ない危ない。

<手塚>

ちなみに萩尾先生は、手塚治虫のものも含めて女性マンガには、性やエロスというものはお感じになりますか？

<萩尾>

やっぱり線の輝きというのはすごく感じます。例えば『リボンの騎士』の話が最初に出ますけど、一体どこがポイントかと聞かれると、「翻るマントと太ももの線でしょうか」とか、そんな感じです。

少し前に友達と「マンガの絵のどこにエロスを感じるか」と言ったら、「ちばてつやさんの、逆の手で汗をスルツとするここだよ」と言っていました。さっきるみ子さんが、ちょっとトラウマになったとおっしゃった『奇子』ですが、小学生であれを読むと、やはりすごいショックだと思います。いきなり大人の世界に放り込まれて「明日から街角に立て」と言われたぐらいショックだと思います。こんな見知らぬ世界に、と。それはすごく、大変でしたね。だけど、手塚先生の線が抱える、萌えの色気は、なんか爽やかなんです。スツと撫でたいきれいさが併用してあるんです。手塚先生は「僕は、どんなに男女の色気を描いていても化学反応のようになってしまう。なかなか色気が描けない」とおっしゃっていたのを聞いて、なるほどと思いました。逆に描けないのはなぜだろうと思いますが、一種過剰な暴力がないせいとか、医学博士だからつい医学的な解剖学的に見てしまうのか、そのへんはどう思いますか？（笑）

<里中>

ごめんなさい、こっちで引っ掛かっちゃって（笑）。私なんかは本当に、手塚先生や萩尾さんと同席できるような者ではないですが、本当に下手ですみません（笑）。確証を持った線というものがありますよね。それそのものはすごく色っぽいというのは分かりますし、萩尾さんの足の線などはすごく色っぽいですね。

絵に表れるものはあるんですが、やはり手塚先生の場合、他の作品をすべて見ていて、やはり探究心だと思うんです。『火の鳥』はすごく好きなんですが、『少女クラブ』版の『火の鳥』の時に、ロマンチックで波乱に満ちていて、少女マンガとして十分成り立っているんです。私はあれで「トロイ戦争」というものを初めて知ったんです。みんなセクシーなんです。「ギリシャ編」に出てくるヘクトルとパリスですが、すごくセクシーで、私の頭の中でトロイ戦争というあのイメージがあるんです。少年雑誌（『漫画少年』）版、『少女クラブ』版があって、ご本人は描き足りない。『リボンの騎士』もそうです。『そよ風さん』のキャラクターが『ひまわりさん』になる。どんどん掘り下げて行く人だから、やはり、究極エロティシズムというのは、生命や宇宙の根源だと思うんです。『ジャングル大帝』の持っているすごいテーマは、ある力が働いて、地球上の大陸の分裂の根源などです。だから「永遠の命」や「大陸分裂」、「他の星で生きる」とか「種の根源」にも関わる話があるんです。そうしたらエロティックな雰囲気がしないわけがないんです。

<萩尾>

そうだったのか。

宇宙の環境、ビッグバンなどを考えると、どうしてもやっぱり…。

<里中>

何らかのパワーがないと、何ごとも起こらないわけでしょう？ 生命を作るというのは、男女の接触があってもすべて妊娠するとは限りませんが、人間が子どもを作ることが一番簡単で、分かりやすい形です。そんな大それたことに至るきっかけとは何か、ということです。萩尾さんも言っていましたが、手塚先生の絵のどこが色っぽいと思うのは、ももの裏側とか。

<萩尾>

裏側とまでは言ってないです（笑）。

<里中>

絶対本人も意識していたと思います。

<手塚>

なんかお二人のディープな対談になってしまいました。

<里中>

すみません。『火の鳥』で他の星に行って、その星に合った命に形を変えて、ももから下ばかりが生えているようなものがあったでしょう？

<萩尾>

はい。太もも植物。

<里中>

あれは描いていて、すごく楽しいんだろうなと思ったんです。だからあれは、先生がお好きな形なんだと思うんです。ももにエロティシズムを感じるというのは、すごく当たっているような気がします。あれは描いていても楽しいんです。

<萩尾>

さっきの『人間昆虫記』の絵でも、太もものラインがすごくきれいでした。胸のラインよりきれいでした。

<手塚>

お二人のお話は尽きないですが、他の方の発言もお聞きしたいと思います。今日はかなりやられています、るみ子さんにちょっとお聞きします。身内なので非常に恥ずかしさもあると思いますが、逆にエロスということとは関係なく、手塚治虫の描いている女性感・女性像で、どのようなところが印象的でしょうか？ 例えばどのキャラクターのどこが魅力的かというようなことはありますか？

<るみ子>

その前に、またエロの話に戻させていただきます。これほど、自分の父親をマンガ家の先生方に「エロ、エロ」と言われるような場に私がいるというのも、そうない機会ですから。まず、自分が父に、エロティシズムを感じるのに嫌悪感があったというのは、たぶん10代だったからであって、自分のお父さんの、例えば引き出しからコンドームが発見されたとか。

<手塚>

そんなことがあったんですか？

<るみ子>

ないですけど、そういう感覚で『奇子（あやこ）』がショックだったということです。今はもうそれなりの大人ですし、様々な男性経験もありますので、さすがに今、顔を赤らめるようなカマトトなところはないですが、先生方のお話を伺って、手塚治虫が描く線の色っぽさというのは、究極に生き物の動きであるとか、生き物そのものが持つなめかしさというところでのエロティシズムという部分では、非常に理解ができます。また変な話ですが、究極には「生命」、最終的に「生命というのは何か」と言うと、オスメス、男女の生殖の部分というところになっていくと思います。人間、あるいは生き物が持っている生殖器というところでは、その姿かたちというのは非常に究極な柔らかさであったり、カーブを持っていたりというところに行き着くんです。そこに行き着くという、生き物あるいは男性体・女性体が持つ線のエロさ。柔らかくあって、決して固さのない、突き詰めていくと本当にそれがエロティシズムな動きを持つものというところでの追求の中で、父がそういうものを追求して描いていく。それが絵柄に表れていく。変態的な話もいろいろ聞いて、うちの父はずいぶん変態だったんだと思うようなお話もいろいろ伺ったんですけど、たぶん究極はそこなんです。身体の中の生殖という部分まで行き着くような絵柄であり、そういう絵を描き続けたからこそ、読者にはそういう印象が返ってくるのかと思った部分はあります。エロ、エロで申し訳ないということでしたが、そこはある程度大人になって理解もしておりますので、非常に面白いお話だと思って聞いています。

「手塚治虫の女性像」ということですが、娘ということがあるので客観的な部分では見ることはできないかと思っていますが、やはり『リボンの騎士』の「サファイア」が、一番象徴的だと思います。男性勝りに戦う強さを持つ部分と、純粋に愛や恋に一途に生きるという可憐さの両方を、女の人は持っていて欲しいという、ある部分究極な男性の理想の女性像というものを求めて、父は描いて

いたのかと思います。私なんかは、そんなの無理でしょうと思います。確かに女性は強くなってきていますし、社会進出もして、男性的に、男性と同等に仕事やクリエイティブな世界で活躍をしていくところがあると思います。ただ実際にそうなってみて、でもたぶん父は、男性勝りでどんどんやっていく女性を認めてはいながらも、どこかで男性を越えて欲しくないと思っていたのかということを感じます。やはり父の生まれた年代からすると、どこかで男尊女卑的な、女性は最終的には可憐であって、男を立てて欲しいというようなところがあったのではないかと、何となく思います。理想は、サファイアであれと描きながらも、実際は、強さとは芯の強さであって、表に出してくれるな。男性を立ててくれというようなところが、父の追い求める女性像なのではないかと思っています。それがゆくゆく男性誌の中でのヒロインという立場で、例えばピノコや和登さんのように、男性が主人公だけれども、男性のどうしようもなさ・感情的になってしまう部分を、そのヒロインの存在によって押さえていく。先ほどブラック・ジャックがいるのはピノコの存在があってこそというような話をしていましたが、まさに、男性主人公が今あるこういう場で生きていけるのは、ヒロインがどのような立場で男性を立てているかということだと思います。『三つ目がとおる』の写楽に対する和登さんや、ブラック・ジャックに対するピノコの愛情の向け方というものを見ると、手塚治虫の中での女性像というのは、あくまでも「男性を立てる」「叱咤激励をする」という強さであって欲しい。それを踏み越えて行くなというところがあるのかと、私自身は思っています。

<藤本>

手塚先生は、るみ子さんに「強い女性であれ」と言われたり、されたことはありますか？

<るみ子>

私は本当に子どもの頃からさかん坊だったので、そういうどうしようもない強さ、強情のほうばかりを出していました。それは最後には認めていなかったと思うんです。自分のことしか考えていない、優しさが足りないということ、私だけなのか、私と同世代ぐらいの女性もそうなのか。自分の主張ばかりを言って、周りを優しさで包むという部分がまるで欠けているところでは、かなり。直接怒られたり、注意されたりということはなかったですが、父が亡くなった後に日記を盗み見したんですが、わたくしに対しては厳しい言葉が非常にたくさん、「本当にどうしようもない女だ」と書き込まれていました。そういう意味では、現代の女というものに対して、特に私に対しては非常に厳しい目しか持っていなかったのではないかと思います。

<藤本>

手塚さんの少女マンガを読み返すと、女の子も強くあって欲しいというのは、けっこうはっきりしたメッセージで出てきます。今のお話で思い出しましたが、『ヨッコちゃんがきたよ!』という作品で、ヨッコちゃんという女の子が生まれた時に、お母さんは「自分はパレリーナになるうとしたけれど心の弱さのためになれなかったから、この子は強い女の子になって欲しい」と言うんです。でも、お父さんは「女の子は優しいほうがいい」と言う。天使もそこでけんかをして、「女の子だからって、弱いて限らないでしょ」。それで「とりあえず13になるまで、仮の強さを与えましょう」というような話になって、主人公は男の子っぽく育て、男の子としてタレントになっておうちを助ける。『ナスビ女王』の中でも、女王になったナスビが、女の子は不当に差別されているから、「男性と女性を1日ずつ役割を取り替えましょう」と言う場面が出てきます。そういうのはすごくある。

だけど、今、るみ子さんがおっしゃったように、手塚先生は、やはり女の子には優しさも忘れて欲しくないと思っていたのかもしれないですね。と言うのは、手塚先生の三角関係の描き方ですね。手塚先生の作品には、実はけっこう三角関係が出てくるんです。普通、その時代には、女の子のマンガの中で恋愛が出てきたとしても、それは『シンデレラ』や『白雪姫』と同じで、お姫様が王子様に出会って、恋をして結ばれましたという話です。だけど手塚先生の作品では、人魚のモチーフがけっこうあるので、『人魚姫』の影響があるのかもしれないけど、主人公の女の子とは別の女の子が同じ男の人を好きになるという話がある。でもその人は、あたしを見てくれない。もう一人の女の子を見ている…というその切なさ、けっこう早い段階である。まず少女クラブ版『リボンの騎士』のヘケートです。フランスを好きになって破れるけれど、あの子も男勝りですよ。『ひまわりさん』も、けっこうそうです。男の子を好きになるけれど、その男の子はより女の子っぽいそよ風さんのほうを見ている。『あらしの妖精』も、妖精が剣士を好きになるけれども、やっぱり「ああ、お姫様のほうを見ているのね」と。そういうところから言うと、確かに勝つのはお姫様になっている部分があるのかと思います。でも、女の子も剣を持って戦いたいとか、叶わない恋もあるとか、ある種の矛盾を全部引き受けるというようなところが、手塚少女マンガの良さだったような気がします。

<手塚>

最初の『リボンの騎士』ですが、男の子の気持ちになっている時にはサファイアは剣士なんです。ところが女の子になっている時には、隣の国の王子様が好きになってしまうんです。剣士のままで男対男、王子対王子になってしまうので、亜麻色の髪のかつらを被って変装して、別人になります。そうすると王子様は、その別人の女の子のほうに恋をしてしまうんですが、元に戻って王子同士としてあった時には、嫌われてしまったりするんです。二人の自分と王子様との三角関係という、ものすごく複雑だけれども、面白い設定を作っています。その中で隣の国の王子様は、やっぱり淑やかなお姫様のほうにより好意を示していくんです。ものすごくバランスを考えているのかもしれないですが、その一方でどちらが主役かと言うと、やっぱり剣士になっているサファイアなんです。矛盾はしているんだけど、その矛盾は承知で、自分の中で理性と心で描いているところがぶつかりながら、ああいう作品が生まれているのかという気がしていました。

<萩尾>

私は手塚作品を読んでいて、あの時代の男の人にしては、非常に女性の取り上げ方が「女なんか」という描き方をしていないところが、非常に好きになった理由です。強い女性や、女性にも葛藤があるということを描いてくれるということもあったんです。また女の人に対して「元気でがんばる人であって欲しい」と言ったということも本当だと思います。というのは、創作をしていると、自分が信じていないことは描いてもばれるんです。そこが面白いところですが、描いたものは描いたもので本当だと思います。実際の生活では、るみ子さんに暗黙の「お父さんを立てなさい、男を立てなさい」と、プレッシャーをかけている。これも本当だと思うんです。手塚先生の頭の中で、この葛藤をどう処理していたのかという、不思議な面白さがあります。表立って、本に描いていることと、私に対することが違うということを行ったことはありますか？

<るみ子>

あまり本と照らし合わせて父を見たということは、過去はありませんでした。でも今だったらきっと、突っかかって行ったかもしれません。ただ、子どもに対しては本当に優しくしたので、逆に厳しいことはひとつも言わずに、自由奔放に育てられてしまいました。父の中では、私に対していろいろと厳しい小言などを抱え込んでいたと思います。ただ事実、子どもだった私に対して、そういう厳しいことをまったく言いませんでした。

<萩尾>

ある意味、元気で奔放なるみ子さんというのは、手塚先生のマンガの理想どおり育てているわけじゃないですか。ここに理想の女性がいると思っているのに、現実理想の女性と接すると、どうしようもない女だと悩んでいたんでしょうか？

<るみ子>

たぶん、理想からものすごくかけ離れていたところに突っ走ってしまったので、これをどう修正しようと悩んでいたのではないかと思います。私が思うには、父にしてみればやっぱり私は単純に「娘」「子ども」でしかなく、そこに「女性像」というものを求めていたかは分かりません。

<萩尾>

人間像でもいいですが。

<るみ子>

母は父にとって女性ですから、母に対してはいろいろなものを求めていたところはあったのかと思います。

<里中>

ちょっと口を挟んでいいですか？ さっきからすごく不思議なんです、手塚先生はありとあらゆるケースを考えて、そこで葛藤がないとドラマではないわけです。本当にドラマになり得るには、どうしようもない事態を設定しなければいけないわけです。どうしようもない事態というのは、「自分なのに、自分が女の子の格好で亜麻色の髪の乙女になった時に愛してくれた人が、男対男だと相対立してしまう」という、こんなドラマチックなことではないです。よくもそういう設定を考えるというのが、たくさんあります。その手塚先生にして、日記に正直なことを書くでしょうか？と思います。つまり、いろいろなケースが想像できるんです。日記というのは、残せばいつか誰かが読むかもしれないとなると、読まれることを想定して、いつか読んでくれた時に「さあ、るみ子はどう思うか」と思いながら書いていたのではないかと。萩尾さん、創作していて日記を書きますか？

<萩尾>

時々書きます。

<里中>

そうですか。私はメモ程度しか書かないんだけど、誰かに見られるかもしれないということは考えます。

<萩尾>

そうですね。毎日毎日、書かれていた日記ですか？

<手塚>

手塚治虫の日記について、ちょっと説明いたします。

子どもの頃からの習慣です。ですから、忙しくなって書けない時もあるんですが、本当に子どもの頃からずっと日記を書いております。その習慣を、ある意味一生続けていたという部分があります。ある程度正直には書いています。親子ですから何となく分かること

ころもありますし、同じ男性として、おそらく本心は丁寧に書かないです。さっぱりと書きます。今日何して何を食べたというようなどうでもいいようなことは、丁寧に書くかもしれません。男はわりと正直なところがありますから、意外と日記にはそのまま書いてしまいます。だから、嘘はそんなについていないと思います。

もうひとつ、手塚治虫はなぜ、あれだけたくさんストーリーを思い付けるかと言うと、言葉は悪いですが、大変な嘘つきだったんです。これは日記ではない部分で「今日は何して」というものを、自分の母親や兄妹に報告をするんです。これもひとつの習慣のようなもので、「学校でこんなことがあった、あんなことがあった」と話すんです。どうやらその話が、途中からかなりフィクションが混ざっているんです。作り話になっていくわけです。だから聞いている相手も、途中で、これはおかしいと分かるんだけど、面白いから聞いてしまうんです。これは何かというと、相手を楽しませてやろうというサービス精神なんです。自分の話でどこまで面白がらせてやろうかという追求が始まってしまうわけです。この作り話を、大変若い頃からずっと積み重ねてきたのが、ストーリー作りの勉強になっていたというところがあると思います。

<萩尾>

結局、日記に書いていたのは読まれることを想定してのある程度の嘘だったのか、本心だったのかというのがポイントですね。

<里中>

たったひとりの読者を想定して書いたものだとすると、るみ子さんは読者として、自由に解釈なさっていいと思いますが、本当に謎ですね。

<るみ子>

たぶん他人には見せられないものだと思います（笑）。そのくらい正直にいろいろ書いているところもあります。父が生きていた頃には本当に、お説教もなく自由奔放に育ててもらったので、後半になればなるほど、父に非常に迷惑をかけるような、奔放が行き過ぎてどうしようもないところまでわがまま振りを発揮していました。そういうところでの思いというものを、日記にひと言。父が亡くなった後にその本音というものを読んでしまうと、本当に胸に刺さるような思いで、申し訳ないという気持ちしかないんです。里中さんがおっしゃってくださったように、後になって娘が日記を見た時に本音を知って欲しいというところがあったのかもしれないし、その時だったら分かってくれるだろうという思いもあったのかもしれないです。里中さんにそう言っていただいて、非常に救われるような思いです。ありがとうございます。

<里中>

世間から見てどんなに、良くできた娘、息子と言われても、本人にとって、いい子どもを持ったと思ったとしても、子どもは親に逝かれてしまうと、絶対に後悔の1つや2つ、4つや5つ、たくさんあるものなんです。だからるみ子さんがあまり気になさなくても、心配するのも親の仕事ですから。手塚先生はああいう性格なので、絶対いろいろなことを探して心配すると思います。性格的にもすごくまめな方でした。やっぱりお子さんのことはいろいろと調べていらしたし、パッと出たのかもしれないです。日記にでも書いてもらえるなんて、いいですね。

<るみ子>

この場で慰めていただいたようで、ありがとうございます（笑）。

<手塚>

すっかり「妹を励ます会」になってしまいました。話が楽しくなって尽きませんが、時間のほうも迫ってきてしまいました。今日は少女マンガというところから入って行って、エロティシズムという話に行き着いてきましたが、珠緒さんはマンガを読んでゾクゾクとするとか、この線がとか、感じることはありますか？

<さとう>

そうですね。でも、美意識が高い方だったんだと、すごく思いました。きれいなものが自然に好きで、里中さんがおっしゃったように、自然を愛するという発想の原点にエロスがあったということで、そういうことなのかと思いました。

<手塚>

ひたすら感心して聞いていた感じですね。今日は最初に言いました通り、珠緒さんも手塚キャラみたいな雰囲気を持っているんですけど、見ようによってはとても幼くかわいらしく見えますし、時々ちょっと大人の色気も見せますし。

<さとう>

そんな、そんな。

<手塚>

でもこれが、手塚キャラの原点かという気もいたします。

まだまだお話を聞きたいところですが、ここでちょっとブレイクをします。せっかくここに来ていただいた皆さんのために、特別なものをお見せしたいと思います。今までの話とはガラッと変わりますが、現在ハリウッドで『鉄腕アトム』を3DのフルCGで映画化しております。これはまだ製作中で来年完成しますが、その製作途中に作られた「予告編」を持って参りました。これはまだどこにも見せていません。今日初めて、日本でお見せするものです。非常に短いものですが、アメリカ人がアメリカ人なりに考えたアトムの表現の最初の映像だと思って、見ていただきたいと思います。では、暗くしてください。

(ASTRO BOY 予告編 上映)

<手塚>

以上です。明かりを戻してください。

ほとんど海外の人だけの手でやっています。日本側からはスタッフがほとんど入っていませんが、唯一私が入って、キャラクターの直しを入れてはいますが、それ以外の部分はアメリカの人たちに任せてやっています。日本人から見たらいろいろな思いがあるのではないかと思います。ただ、これは日本人が作った『鉄腕アトム』という作品を海外の人たちがどう受け止めて、何をしようとしているのかという、ひとつのいい機会になっているのかと思います。そもそも『鉄腕アトム』のストーリーということで言えば、鉄腕アトムが「人間と宇宙人」「人間とロボット」など、ふたつの違う文化の間に入って、それを取り持つというようなテーマも含まれています。日本、日本が持っているマンガ・アニメの文化というものと、アメリカ・ハリウッドが持っている文化というのは、根本が違います。考え方も感性も違います。もしかしたらエロティシズムに対する考え方も、全然違うかもしれません。そのふたつの異なる文化が「アトム」という素材で、初めて繋がる。その結果がどのようなか、ということも非常に楽しみで、制作をしてもらっています。これは来年の10月に全米3,000館ぐらいでロードショーされる予定になっています。日本の上映がいつになるかは、まだはっきり確定しておりませんので発表できませんが、そこから遠からずで上映されるのではないかと考えております。ある意味で、父親の80年の記念の最後のビッグプレゼントということで、手塚治虫が子どもの頃から憧れてきたアメリカ文化が作り出した、リメイクした手塚治虫の作品というものが生まれようとしております。

<さとう>

非常に楽しみですですね。

<手塚>

楽しみにしていただきたいと思います。さあ、少女マンガから始まって女性のマンガ、あるいは手塚治虫のマンガの中の「女性像」ということでいろいろとお話を伺いました。もっと伺いたいですが、お時間がかかり過ぎて参りました。

<さとう>

最後にパネラーの皆様からコメントをいただきたいのですが、里中さん、お願いします。

<手塚>

今日のお話のおまとめでもかまいませんし、言い残したことでかまいません。あるいは、これから里中さんが手掛けて行かれない作品のことでかまいませんので、ぜひお願いします。

<里中>

手塚先生の話をしているのに、自分のこれからの作品の話なんか、おこがましくてとてもできません(笑)。今世界中で日本のマンガやアニメが注目されていると、最初に眞さんがおっしゃいましたが、どうしてこんなに突出して発展したのかと聞かれるたびに「手塚治虫がいたからだ」と言っています。でも、これはお世辞でもなんでもなく本当に、画面構成の基本からキャラクター作り、マンガにはテーマ・ジャンル、ありとあらゆるものが表現可能だということを、作品で示してくださったわけです。その存在の大きさというのは、あと100年、200年経ったらもっと、より多くの方に分かっていただけではないかと思っています。ですから、手塚先生がいなかったら、次の世代の方たちはどうなっていたか分かりませんし、私の世代もどうなっていたか分かりません。マンガというものをドラマの表現形式のひとつとして利用し尽くそうとする、その結果出てきたジャンルで、テーマを問わないドラマ性というものがあるわけです。本当に感謝していますし、勝手にですが、一生自分の先生だと思っています。

今チラッと見た『ASTRO BOY (アストロボーイ)』は本当に、アメリカ・ハリウッドの感性の『ASTRO BOY』なので、それはそれで楽しみたいと思っています。チラッと見た限りでは十分、アトムのコケティッシュなキュートさも感じられたので、楽しみにしています。なんとと言っても、昭和30年代の実写版のアトムを見た世代ですから。演じられた俳優さんには何の罪もないんですけども。

昔の、14インチのモノクロのテレビで見ている、タイトにしわが寄っているのが分かって、すごく悲しかったんです。原点はマンガのATOMですけれども、いろいろなATOMがいていいと思いますので楽しみにしています。

女性マンガがどうなっていくのかは分かりません。なるようにしかならないと思います。成り行き任せです。最初に萩尾さんがおっしゃっていた『ナスビ女王』の構図のように、手塚先生はマンガの描き方で構図ということにこだわっていらしたんです。映画でもそうですがマンガというものは、ここがどんな場所で、誰と誰がいて、どのくらい離れていてという基本がないと、読者は戸惑うだけなんです。だからもう一度、若い方たちに基本の手塚マンガを勉強してもらいたいと思います。

<手塚>

ありがとうございます。

<さとう>

続いて萩尾さん、お願いします。

<萩尾>

私も、これからの日本の女性マンガがどうなっていくのか、さっぱり分かりません。やっぱり人間は、物語る生き物だと思います。何かを物語って落ちないと、脳の整合性が保たれないようなところが、どうしてもあるらしいんです。これからも物語の世界というのは、いろいろな意味で続いていくのではないかと思います。映画でも、小説でも、そのひとつとしてマンガも、非常に受け入れられやすい媒体なので、続いていくといいなと思います。例えばこれは空想ですが、最近は食品の安全に関わる事件などテレビでいろいろとやっていますが、年金がもらえるかという話も含めて、間が複雑すぎて理解できないんです。ちゃんとキャラクターを立てて、この人がこんなことをしたからこうなったというように、誰かこれを分かりやすいマンガが何かで描いてくれないかと、よく思います。経済3面記事マンガ？

<里中>

今起こっている事件をお芝居にするというのでは「近松」や「シェイクスピア」がそうです。手塚先生がいらしたらどのようにお描きになったか分かりませんが、せっかくなので萩尾さん。

<萩尾>

私は理解ができないから、誰かにお願いします。  
必要とする人がいる以上、そのドラマが生まれるのではないかと思います。

<手塚>

ありがとうございました。

<さとう>

続いて、るみ子さんお願いします。

<るみ子>

身内ながらも、今回の「手塚アカデミー」のシンポジウムにパネラーで出ささせていただいて、ありがとうございました。こういう機会もなければ、父の少女マンガあるいは女性をテーマにしたものを、見返すということがなかったかもしれません。今回の機会は本当に、わたくしにとってもいい機会でした。また、里中先生、萩尾先生、藤本さんのお話を伺って、改めていろいろなことも分かりました。父がどういったものを描き、少女マンガの中でどういった斬新なことをやって来たかということを知り、非常に勉強になりました。わたくし自身が、父の作品を元に音楽のコラボレーションの企画などを生業としているものなので、そういう部分で原作はありますが、そこから発信されるものを次の世代の方がどう受け取り、それを自分の中でどう消化され、自分のクリエイティブに生かしていくかということが、見ていて非常に楽しいです。それがまた現代の方に違う形で影響を与え、その方がまた3世代目として、新しいクリエイティブというものを生み出していかれる。そういう数珠つなぎ的なものがどんどん生まれて来るというのが非常に嬉しいですし、私自身がそれを死ぬまで見ていけるのだとしたら、それを楽しみにしたいと思っています。

今日は少女マンガの話のいろいろ伺っていく中で、例えば今、浦沢直樹さんの『PLUTO』、『どろろ』の映画化、『ブラック・ジャック』のアニメ化、『鉄腕アトム』のハリウッドCG化と、手塚の作品がいろいろな形で新しい方に手掛けれ、新しい作品として生み出されるということはこれからもどんどんあって欲しい中で、あえて手塚治虫の少女マンガというところに注目してもらい、映画なりドラマなり、新しい作品で満たされていくような機会がこれからあって欲しいと思います。また、少年誌に描かれたマンガであっても、そこに登場するヒロインをあえて主人公にしたような、ヒロインの立場から見た映画ドラマという新しい何かが生まれて欲しいと思いました。わたくし個人では『やけっぱちのマリア』が再注目されて欲しいと思っています。主人公の「やけっ

ぱち」と「マリア」との複雑な関係の中で、「やっぱち」が男としてどう成長していくかが描かれているドラマなので、ぜひこれを、若い方に注目してもらいたいと思います。

<さとう>

ありがとうございました。続いて藤本さん、お願いします。

<藤本>

言い損なった小さなことからですが、手塚さんのエロティックな線というのが「萌え」のひとつのルーツになっているのではないかとこのお話をしました。今回見直して、けっこう髪の毛がポイントだと思いました。「亜麻色の髪の乙女」というのもありますが、例えばサファイアの髪にしても、あの形は現実にはありえません。今、海外で「マンガヘア」という、ドラゴンボールの悟空などの、現実にはあり得ないような髪をディップなどで作るにはどうしたらいいかというサイトがあるんですが、そうした「マンガヘア」の、ひとつの原型ですよ。また、女の人の風になびいた長い髪が、まとまったまま止まっているというのも現実にはあり得ないですが、このまとまり方と風になびいた曲線が、萌えのポイントらしいです。その風のことを「おた風」と言って、「おた風を吹かす」と言うらしいですが、手塚先生の作品を見ながら「わ、おた風が吹いている」と思いました（笑）。それもひとつの発見でしたね。大きなことと言うと、最初に、「手塚さんの、特に少女マンガは、心の秘密を描こうとした」と言いましたが、やはり「心の秘密」というのは、完全には把握できないんです。矛盾を含んでいる、葛藤している、引き裂かれているというものだと思うんです。手塚さんは自分自身の中にも、そういう葛藤や矛盾を抱えていらしたと思いますが、それをちゃんと作品に昇華してくださっている。そして「矛盾を抱えている、葛藤している、引き裂かれている」存在というのは実は、特に思春期の問題なんです。今、海外で日本のマンガがとても受け入れられていますけれども、そのひとつの共通した特徴は、海外、特に欧米には、思春期の問題を扱ったマンガというのは存在しなかったということが大きいです。芸術性のある、絵を見せる、ストーリーで読ませる、勧善懲悪でスカッとするというマンガはあるけれども、思春期の問題や葛藤を扱ったマンガはなかったんです。だから今、海外で若い層を中心に、日本のマンガがとても受け入れられています。それはたぶん日本のマンガが、戦後に手塚さんの作品を始まりのところに持って来て、その遺伝子を受け継いでいるから、というところがあると思います。思春期の中でも、特に女の子は矛盾の中に置かれる存在です。思春期でなくても女の子は、期待される役割と、自分がこうありたい、このほうが楽なのに、という感覚の間で、常に葛藤を抱えなければいけない。たぶんるみ子さんもそうだと思いますが、そういう存在だと思います。その葛藤が『リボンの騎士』の中にもある。日本の少女マンガというのは、世界でも稀なジャンルです。ある時期まで、アメリカとフランスにも少女マンガはあったんですが、それは潰れてしまっていた。そこに日本の少女マンガが入っていくことで、海外の女の子たちが、「私たちはこういうことを表現してもいいんだ」。先ほど楽屋で、里中さんがデビューなさった時、「女の子がマンガ描いてもいいんだ、若くてもいいんだ、女性でもいいんだ」と読者が励まされたというお話を伺いましたが、それと同じように海外の女の子たちによって、今、「こういう表現があるんだ、表現していいんだ」と、日本の少女マンガスタイルのマンガが描かれ始めている。それはとても嬉しいことだと思っています。

<手塚>

ありがとうございました。今日はすごく示唆に富むお話を、たくさん聞かせていただきました。

僕が今日「女性マンガ」という無謀な題名のシンポジウムを考えた時に、その瞬間に自分で、ありえない、マンガはマンガであって、男性・女性を付けること自体が現代的ではないと思ったんです。思ったんですが、少女マンガと言われるジャンルがあることは事実で、藤本さんがおっしゃられていたように、思春期や心の問題をずっと取り上げてきた、男性マンガとは違う視線がそこに存在していたということも事実なんです。その発展の上に、今の女性のマンガがあると思ったんです。少女マンガからずっと築き上げてきた女性マンガはどうなるのかというようなことを、お聞きしたいと思ってのシンポジウムでした。半分ぐらい、結論をお聞きしたような気になっています。先ほどから、手塚治虫の言葉で「この先どうすればいいのか」ということが明確に提案されているんです。それは「究極のエロティシズムを描く」ということだと思いました。これはエッチなマンガを描くという意味ではありません。レディースコミックを目指せということではなく本質的なエロスです。男女の性を超越し、自然を含めて「生き物」「命」「存在そのものが持っているエロス」というものを、マンガの中でいかに展開していくか。その上で、いろいろな展開の仕方はあっていいと思います。その中で究極のものを求めていくということが、一番求めやすいジャンルとして、女性作家による、ある世界が提示されつつあるのかというようなことを、今日のお話から感じたことです。もちろん、マンガというものは今、ものすごく多岐にわたっています。その中には、手塚治虫からまったく離れた文脈のものも当然あると思いますし、手塚治虫的なマンガだけがすばらしいと言うつもりもまったくありません。手塚治虫をまったく知らない世代による新しいマンガも、生まれて然るべきだと思いますが、おそらく皆さん、作家として作品を描かれて読者の方に届けられているうちに、最後に目的として向かうところが「エロス」ということになっていくのかというのは、今回3回シンポジウムを開かせていただいて、3通りのジャンルからの見方を聞いた、自分なりの結論でございます。はっきりとした結論にはなりません。むしろ、これから皆さんと一緒にどんどんこういった問題を考えて行きたいと思っています。それによって、明日、未来というものを、もっと希望を持って感じていきたいと思っています。

<さとう>

パネラーの皆様、今日は長い間、本当にありがとうございました。

<手塚>

ありがとうございました。

(拍手)

<さとう>

お集まりの皆さんも、本当に今日は長い間、ありがとうございました。

(拍手)

<さとう>

このイベントは、来年の4月に当江戸東京博物館で開催されます「手塚治虫展」のプレ・イベントとして行われました。

<手塚>

来年4月に、この江戸東京博物館で、久し振りにかなり大きな、手塚治虫の展覧会を開く予定になっております。お手元にもチラシが行っていると思いますので、ぜひまた、こちらのほうに足をお運びいただきたいと思います。

<さとう>

そして、この「第2期手塚治虫アカデミー」も、来年4月に当ホールで3つのプログラムを開く予定となっております。

<手塚>

来年は「アニメの未来の話」そして「アートに通じる芸術という面から見たマンガ」最後は「永遠の火の鳥」ということで、手塚治虫がライフワークとして追い求めた「火の鳥とはなんだ」といったお話を展開しながら、今回の話のさらに先を語り合っていきたいと思っております。またぜひ、その機会には足をお運びいただきたいと思います。

<さとう>

皆様、お楽しみにしてください。またお目にかかりたいと思います。今日はありがとうございました。

<手塚>

本当に、今日はありがとうございました。